屠師那實句斜

七八九度

共九冊

特別
へ4
8179
4

昭
八4
8179
4

うなゐ草巻第七

享保十一丙午年

初春松　長濱知足庵にて當座

一入乃多ちうこの春に生きふくものとをれ岩の松を

ちとせのやどりやまちくるうぐいす鶴の松の春はしら

天満宮奉納の内梅風

神垣や梅咲ほこる吹風の小ゆるひもろの天ぬ海うん

雑春雨

陸の春もうちそそぐ春雨打ちそめうるみ打ちそめうるみ

弥生十三日東山定禅寺にて猿之同表山科

小宿十六日山科を出て

咲残の冬ぬ春ぬめてこ行猿ハむ山の道もさくもを

同日石山寺小海にて折しも花のちりはのち

ばんてらくひのあ白ひのと出ばくきくん古とれやと古ひ
ゆく
石山の景石小風の吹あめてあるあ白ひの花の志くゝ者
ひあくり小遠ばせくれし　詩侍春巖老師をとひ
あるに云ひの表遷化ありしと人のいひきれた
云れ葉の拾ひけりと形ん和て老木の松ことて乃者形
廿七日泉村泉福寺に宿廿八日花菊山園菩寺ふ
きのうもるあ花の表陰くいとなまめるる女あきく
拾ひたてけき所のるあ山寺ふ八ん名あ似ゑれし
木形くくましふとしおしくりむくし北殿西東
福寺れさくをきくれし八教風京れ志ゆとうら
くしも見又夏なるく浜西の上人ひくく桜とくく
半面ひあんもさくいりあ形くきる

見も又あくく桜のこうなれや花ゆめそくるあ去のあを面見
ゆくはきるあ世ふくりあ岩坂の最勝寺にまくつ四日よ
名小夏姫ゐ已刻ちるふそくれく生くち於海ち
日枝をくむ卯月朔日国くはなめ三日出花く
て津乃駅酒にくく人るくのんとせにいるめし
くいくれち孫あのうきるにおぢおのきくふ
やく馬八くけきもうるあく馬ゆ八いくして京
へきといしにまだあくうあるはる花般くくいや
これあの乃程ゆくはをなのまくは馬八ちそのる
ゆきくまて姫くくうえ畳面くまくくちくう
はちきゆへおのくくにゆ孫まくるなくそれ
ふこて乃の馬ちゆ八話ちんもいやちくのそれを
ひるあくをハは話ちんふくのそへきやあくく

不了尊のふしぎなれば嬢人うるのまやくとそるを
波人れ家へ云きうけきハのるのハありしもちうす
おどろ〳〵しくこひあのるをうてしば嬢宿のやう
正直形形いひやうなるいふ話ちんいまうふとそ
も命うて大事ろれひろいやくゆきちちふきし
らへハまごいしく立腹してさふハあるたくこうと
面うひこいさうひのくちろうきたしく面くたちく
ゆちうて知くおしひあるハあふハ道理の妻理を
又世理の理理ふこうれハ見妻理の理理とい
面理や理理の妻理といへちや
四月お可奥井亨ふ若又日
伊勢参宮六月お可ふ後者七日の夜面ふ形八日
出宿のわるしとうとちひ見国弟玉ばたれあき

おさの星りく
変衣今やちうん後女うのふこういとのあさあさの星
岩間村上村をとおりて竹河て
河の名れ行の係れうるうくたち
いりくうに琴弾れの義として陸奥をうの国
赤をとひくうれたくうたくうるうるやえさを
入うたやたけるく業ば嘆しわをうを婆ひうう
れくとひうをれかくつうれ板ふうるひうを居眠り
たうるくうれくむれうるこの老義年ハ常うり
琴を弾きこの光のしくこうハうるを世くい
つとなくく琴弾れあれくくかせにこや
ううひうくく老の波光ちわうるくくるかけく
変なりうて弾れとをきこうても再志いくこ

八月もきさらぎ十五日なれば、せんきょうの人りやりきて
つとうりし事のいと哀なれば、
琴の弦をもちし芸妓今なりも我庭なるの少へさりせば
金剛坂をとられ、新文化海舞踊を面白くまきて
はるかに来ぬる花森の中に一本の松を志めのうりを
ろきうりあて出くる神さび芸り
いりあせしいつたの文化の松に物志めなし
家ろうもろふ物のくるの石のかりれ池中小ある立
たりし花松を出へ立ちらしと老夫人同生れた
弱ちの雲とやうろ見なん名本あて神代ろう
代く弱くもおれしさ面ふく生長せたとさも
ろぬへきうりをいとけろ花時ろう人剛しに
面けもち校のまいさうをうるるもれし

とふ小庭もうつしえまりしき垂樹ろう山
整理地面ろうつ大淀のうふ出くるくのため、
むろひいこう海ろ伊勢や尾張のごく
つ溯ろうしろ泳ぐ八重木れ松校ふ
てまやふたろれて洲海志ろうさ出くへに
ちろ植のさ沢本にのくへなつ居江の第も
ろくさろを彩く時のまふやうろうて阪京いと
人うれし涙雲おかうもろもろ校口
方小元泳ろうおりくこれ松一本まの人く
竹しふ見こそ名ろ花業平松めてさろへろ
五五中ねの詠しろ松見今ろ五二十年
中へまくハ山不ろ代ろの校さしおほしー本
陰お後さふんろ尾百歩ろうやろん

なつかしうかたるにつけてこのはをちらす山てゐてうらう
ゑうハかりし時なれハこのもとに立つまつあるひ
名ゐ見ゆるおほいさきにたちへしさかりしに一とせ
神の方ゑ風あらく吹くはかの小姫きまゐたし
千とせのうちひもこの行ひしてゐをあ〻ゝと記
ゐめてたりしさまもをく〳〵記事なる孫を
仙村星家くにわたりてゐとちとの後
もたりくしあるゝをかりてゐれ山もおりし根
さしかゝれ小きりゐ施くなりのうしを
古殿宣後とい人風雅乃公深うまるしあ
まりに延宝八年ゑ山雲球植つ記しうり枝葉
うくにさうゝ又う彩大木となれりとゐあり
伝し山本信ゝ志ハしやちひゝ

大潮や去ゝ風の勢ゝ高原しゝ人ゐ溜浪
やはゝ不北社ハ年ハの社球ねゝさむえのちみて
梅の球あるひそわゝる月ゝ波ゝけてさむえ
山頂ハこの村乃近接寺にゝ孫を世寺に波むゝ
この風小あれし松の根をいゝゝ秘めをれゝ
球部村石産ゝせゝやゐむとなれ世方小ゐりゝ
きとをゝしのゝ名ハ内ハいゝきへ
記ハもあるゝたまりゝ行ゝはゝものハ
神ゝつゝなゝゝられゝ神ゝはゝゝわゝ湯
田乃あゝ子実の石とい球ゝゝ
ゐてゝれゝゐのゐゝの名ゝゝて子実の石ハゝこゝとゝ記
かの松ゝゝあて
このはゝ村ゐゝゝ孫ハゝつゝゝやゝゝかゝ松原

十一日、お可れちうれこうろくを拝領せ
十二日、加賀に出さに法きりされ来后をわつふたの方
へ行こうかいとふ不をせれこうさ松の村を西れ不
一合乃濱ふいて
織女の祭りのこうハ泊まりぬまふ　神やり　合の濱
山濱ちう星合むちう乃　一合の社ち国こて例れ津
の宿ちはきぬ
十四日、関ふ海ち同欲ちう町を西海十六日
ちう十八日まて四日市に泊り十九日ち出て
桑坂観音へ参詣同欲くちれふ旅宿古日西中
に山田氏乃度の家をたつね
陸西にちさうして咲花の志ふいもちうく加賀なく
廿日、市居寺ちうく尚庄浦芝月

れこうろうひも波ふふのやちれ二えのうしれ文化秋の月
河夏稜
おりふ事ふあ芝月乃日稜川ゆく淑をまぬ麻の中ふて
立海ちおりふハちれうちき川こうしのなうをこ西ち白波
廿一日、西を中やこ形し　上市浜ゆて尚庄
野徑霞
西来つち泊ちて乃ふ深ふまくに寄むふ来世も泊ハちれく
内て西ふ沈ちて形れ武さ世の寄をちく海道のちうき
廿二日晴　天宿を出ちく　がとう大田ちをちひむちう乃
あくうちく郭公鳴をきて西
むちの名れ深ちやちあふ星ふ鳴ちく西沈山ちとき沈
牛馬を世ちうひちう牧臺ふ和ちひちう事数
ふ弱世ちひむちうこいなきく

いつも平保も公ゆるされたるおちうへ西ばさけハ弱のを称むら
志川むらやいふ所なり
志はら村や浅ら志からきも所から木こり道まうり本のかさなく
此所ばさ比山の林藤ふさひて松原ばかりつゞきて
目もちや道ふかりおしも家路を悔る山人みゆるは
吉老の瀧ある吉老の寺ハいとふるくそと同ぎれハ此川原
ばかりのなかへしと行きのおもろきもいひさそても
うれられたる友とするへと共にふりつる杖をのこちら
らあそく時しもくるりやミふの行く行かれおやうき
孫く多る石を姫こ詠ろちしてみくもされハくろ
うえりたんとしつ二り縁とりしりて寺ふ若けさとれる人
きいひ以れらくされハ一夜宿事いとやすらかに入れ
とも値偲ぶもふさまりてハさそゆる也へふは仏み意し

うしろ高へなりにもころく出ばこゝや登りこまま
れの極まで山越をのぼりんと思ひしけるに此所寺ば
かりた誘ひしにの閉門ことといつて去るこなやうもなく
へ行山中なるま夜中一家も外へ出てむへき彼ら
於し此み寺の世話ふりおかせ給ハさて八堂のえ
人の屋法事新れ下つきにろうとも一夜ハおさえて
へしとすゝめく小さいとも致はくしらくもひまれども
文ふうけさうとせんかくきおうしきらハ人わきり居ある
へみ毎まちるへしとも仏道ハいさくしろう入とさ
起きもし我去りひつく山越来ぎれたちもや二ツ三
ツ斗ほうけ不のふつく西ろふいひちりきれハ肉たり
おちかあるる哉るるしつさ伝ふにおそれたれとやおもひ
あんあのくれやうかへ渡り去りり宿かし彼

いかまく人あまたしえさくおもひまでへしかはさなる谷
なの出水をひとく山の奥なさしてかの下ゆをとも
ろうふかく入りて又右のうへちかうて小河あるそれは
志賀のふみかよひけれは家なりきとこめて来る御坊と
世のわたらへしといひもて行に波寺ちかう居られ
のりのは聞えぬやの時のかたふそきこえもいとあはれによ
しさかれかしいひしに山のひとくやころとやさいてし
のけはさりせは此山の松のは桃花とよもし給ふにいかゝ
る岩陰にもおうさいやと思ひともにあけまし山とせ
けむひとつうちかうてひゆけは一村竹の奥より人家あるを
まちくにえたちかへりもやなとほかうしもされとまた
さし地まつおのかちかねぬ山路のさかりの粮も出まかう
ねうちはしいてくといひもかへるを出てく行城路より

きひてきけはうきふかにかむもまゆけあかや
めなる人あめうされともかはかれの心浅うろうさはしなま
つふやまのちかやすもまさもいとかいそおましへきん気さし
波寺の情なほふおもひくへて見いとくうれしさ
いうんうつなしさて来る御坊にかく山のことを
れは宿はのしまゆくさへしされとかにかいうちまへ
き物なしとはいさしくもなくてきぬといふそれかう
らいのまへ見山く一夜乃事ちられたとそてきやらん
級とて冬雑ぬきまてやうそうすもし路まゐ
られも竹檐ぞ朱火山家のおもむき見まく雲蘇粮
の思ひ出見ちかめりといへしびかしのいさかさ見
こやすにのろ住居かく何をまてあは見へき
物を待ちまてもらひあかして寝にはあなとにふ袖

きまく数山路のはてれば見あるく時ハ
味のまもるとせあるこもるくもはるかに海さまへ
いきそれ生きまへといひもれたり生きうつり
あはれあるもをあるいとうるへの三月のうふわるを
ゐ中にはうけあるいひひみくるはまハ
つゝあるれ茶碗やしのあるふるとうけ生
にはて酒くるる風味丼飯をふくむ仏花器食
はいくる肉ふるく食こう者れもあちひをの
まくしうるものはいわをもやはとま
こと方形はくくとる器中をうを生肉麦の八元清
の面くれ山こるるうれまはれ和なるとあく
はくこうりきはくまてくひくくはるの辛苦を
ちくくる色をこのこ酒はあるくこ拙真のこあく

をのうちくにくくもとくもうくおとはしきあるまや
おとおくくらふわうくとはをあくくを人はうあをを
はけハ後一人はのこふ松の火はもはくあるふ
やくは老者老者へ後あを人宿泊事やされ
しふいるくをれハ山の奥へ風ひゆうれをるとなむ
ちハしはるふいしてうりのかせにうはく
くとおを人はのまういくハふふ山中ふ狼の
山犬のそあををれりのくを生はる猛獣のふいも
あをれハいくまをきやハと見まくあつくを
うとはうしにたしめの布とはうきけわきやうに
おしくうとあ中ふ山路をたくひあり好れ
あはしをさしは山の器ちうもあるくを人宿ちうも
ふうしをやりをへきさて宿はうれまうしをは

ともしきれハ住侶ぶへまかせて彼へのかりしにすれ
ら此寺なるまでハ旅人ハ頭みてもともなき事の
うくきえへうつりしと創しきれさすけくハ頭の御に
むすめのえへさしかせしきに頭ゆるし給ひ給とゆされ
きおみハ炒へまゐらするにうらむ亀らうさ給るまゐ
こゝも又の日菓子なおむさひこれならずのなり
名に高き紀貴き乃瀧をたづねて
汲人貴き瀧をやしなふ瀧は岐阜へ下りてや名まで流れて
幾千世の数にかさなりもむかしき也を出て瀧の名よりまさ
宴なりなるべきをしこしゐるとはゆり高田に至る
体こゝはあしも市あるは日ごとに人むらかり何事かり
て道もさかりはへきた紀念くいとかぞへし付ず
貴き酒ありいさゝかしらすゝ沢田牧田などをへ関ケ原

乃古戦場を一覧同驛に休らひやどゝなりて宿かしと菓
をく御しらせ西のえうへ五二八町もいりとて荘すと
大関といふ所ありこの人家にあるの小の祭り人
細に古城出れバ月見塚といひて本丸にいとゆゑ二ツ
あり、されば此の大路に添うてしく又西へむかへハ黒む
れかくるゝ坂の名ちかひ所あんと云ふ不の名れ方
萩まるをひてちかきの地蔵菩薩あり不破の
関やの旧跡とて玉えらしゆる六こそぬ家とゝふ
ませ

六くゝきぬ世にもうえけるに話なりれや不破の関やは名の記とめて
家はた関とくかせとも実ハ不破郡松尾村といふ
あるとあらハ世にし里の中ハのみつ所へ関の荻
川も関ケ原北里なり一里八町小田への通路なり

山河を関流れ出るといふ事にて
今は江戸の内なれ
ども
さてはなれあふみ
さくみさかの林氏の屋敷
こそ若むせる大石二つ
ありしが
関の板川今は近江に属せりと
北世の時
関を
又不破関のあるべき
なりしを山城
なるべき
八宮の板川と名つけ

川なれば世俗に墨丸名をとどにたるぶるのなれば
の名どころ
山墨丸名ふなしてあやまり
十四日空濁く関ケ原の宿に
夜
山ゆきに
立さ八紀
とそ道
板の
ふしへ
今もその

川なれば世俗に墨丸名をとどにたるぶるのなれば
の名どころ
山墨丸名ふなしてあやまり
十四日空濁く関ケ原の宿に雲井書世
夜
山ゆきに
立さ八紀
とそ道
板の
ふしへ
今もその

されとゝ仏の教うせ給ひ波斯匿王の粥乞ぬ
ゐいらてのせゝみ流布せん佛ゝ提婆太子ゝ
おゝひおりとゝく教ゝ正路ゝさうとゝく却て
法の四衆ゝ事を聞くゝはとゝれ見宿世のゆゝ
うそ侍くめ凡毒虫汝ゝさにたとうとし
教正一如ゝ右めく邪をもゝむ毒とゝ南無阿
弥陀佛ゝくとゝ云うしゝ法ゝまに毒ひ赤坂
長久の海ゝ法とゝ菜后ゝやとゝ法しもむゝ毒
ゝしゝをれゝ右ゝしゝをれゝ法ゝ之知ゝ中ゝ仏
墨とゝ書ゝいつめ紀河ゝ行のとゝ法とゝ世ゝ寒嵩
不海とゝ法ゝ法ゝ右ゝ法ゝ世ゝ岐阜加
鴻亭に法ゝ仏法五日稲葉山ゝ糸法ね
殿毒酒茶嘆殿同晩炊ゝをれゝの許ゝて食

毒せゝ法ゝ毒ゝ毒とゝれゝ人ゝ加鴻若右馬ゝ右芭蕉翁ゝ
筆記せゝ十八樓ゝの句ゝ彼自筆の一紬を毒ゝ
毒ゝ人ゝ毒ゝ寄ゝのゝめゝ句ゝ彼ゝ山樓ゝ
ゝ草ゝ法ゝ法ゝ字せゝ仏樓ゝ和ゝ毒ゝの稲葉山
乃ゝ法ゝ河ゝひの岩法ゝ掉をゝめゝ法ゝ
吹ゝ毒ゝ夕ゝ立の風ゝ松のゝ句ゝを打ゝ毒ゝ法ゝ
毒ゝ詩ゝ得ゝ毒ゝ毒ゝ人ゝ法ゝ川ゝ
毒ゝ仏ゝ毒ゝ川ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ
ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ
小毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ
法ゝ門ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ
毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ
毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ毒ゝ法ゝ

しのかせかとおもふ上らう石のふうう火の波ふうう
ふく舟ひかまくこてるかさ毎めつうれうえあのかう
風ふるる稲ちの山のふもと川ふふもそしに紀ろれうう火
うてる火の音色ちうふく稲ハつふさうきうこハふふ
とんく眞おきとにいひしうと毎のひくうふ教生
のおきなれえハいのちうるうしうう毎ふ六日
寺後岐阜城立加納のひくうをるくちに紀ちう
名城えしい往来の松ちをうる事法ううくおハし
面城ひそひやちうしふ祝
幾千世の往来ハの云ハ業をこの一ひとの雲ここめむ
うるとのうこおうきしうう舟出ひうかがどのと
ううのしも業法ふふふふ紀面ハ風おふ
くおまちう毎舟城ちうるれませちく

ハまうう風京ううふうくうるもちうおほう
に名おるくはるれぬ舟中小一夜とまうくれ七日
この時ひうくハおるおハいこひくうれね
おうこのしてハ宿ハ出海路ハ夜をうるひ月
二日法ハ乃房小海待十三日夜雨後う
鶴ハしうくうるも涼紀ふくつこ巻ひうふ夕立の法
梅月堂八十賀
対蕉翁年齢
老の波形立海ハ和うのうこやあ名この半月も千世もうき
安藝宮ちうのみを立ハうけハうそこ八ハ川し
ハ毎ふりく法名玉山柳桜の字ふとうれり
老くまちちうの別をそのまこにハハ紀世の名おちうとハ
七夕
意くて年に一夜の妹しさハ法くうやの花ハあまのね衣

野虫

あるかなきかの命にかなしかりしも虫の聲

唐鴻白響　　城中有後浦八景之内

夕波の立ちとゝのへし後海の浦を祈てふかぬ白さゝ

八月十五日法園寺鎮守　八幡宮奉納

池上月

さやむ奥もかくれうるてや淀のうるれ物を月ふるうゝ

因幡月ゆゝく

なうるかるゝ名をもいさるゝ月の文古う

十六夜法園寺ふく尚産

源次郎

いとゝ月ゆゝ月ふる文ゝ生ゝ　おるゝまの秋ゝ

八月十八日の夜ゝ　ゝ世ゝ　憲通

和尚の中思ひ出ゝ　ゝきゝふ感慨をゝふせ

八ふやゝゝふ爰ゝ法ゝ

なゝ月ゝも我おゝし祖を長ゝや爰ゝゝ云ふゝゝ

おゝゝゝ人のゝゝふ追悼して垂ゝゝゝれゝなゝ

欲きゝゝゝ祖もゝゝゝ数ゝゝの名ゝゝの秋のゝ月

九月十三夜ゝゝゝ

波ゝゝく松ふ樟ゝ法ゝ月ゝゝ数ゝ月の七月のゝけ

市ゝゝに出ゝゝゝゝゝゝ法

世のゝきふのゝゝゝゝゝ市ゝやゝ山法の唐ゝゝゝ

九月ゝの夜ゝきゝゝ

明日ゝ和秋ゝ月ゝゝゝゝゝに麻の唱ゝゝ

初ゝのゝ法ゝ　ゝゝゝゝゝゝ麻ゝ唱ゝ

虫のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

尾花ちるうら枯葉やそうらし　梅ら後の三世の涙を世

来月日本橋墨小宿六百はこ所を出く宇治

川のかりゆく蔦葉枯

きえれハ紅葉なれく多くにうろひの八ら宇治の紅葉

風早故中納云實種々十七回忌法遠ら合乃俳生

影冷泉家ら雪中述懐

物うそひうそものもうれ法の橋苑ら花比枝の志ら寄

来月十五日曉庵桃時を吟ス

秋うそとさとふもいハしを寄ら月ふをしら写し人

十二月廿六日朝雪のつりなれ人ら

白ひうそまくこれ後つりる寄を苑形ら庭の梅人

春よハ物ら志そのそうを法くしむとい人ら家ふ

いら人ら人を形又共ら人ら物うを悲むへし人ら毎祢

笑ふもの故さ志ていさくこうりぬる見ひと

形く見をのハ一むへし法指やりれつ

ひやら故志ら志の祢りちうの法ひやふ四を

法くへしいのくはうへハ部くわう方に害ひう

常にうらを物せんらうハ不書生なうんりハ

志うし宅故おほくえと学のし人とあもう人

らうハうくはくれ形くして仏安稔成ふハ志うし

人ゝわせ智恵中て智恵おれて智恵とう稲

故志ゆくはるやふ生ふ速ひうものとなんされ幼

年ふしく智ひうとうあも志わうほむ色う

ら志ゆ人なりとうくはきりて形しうる色うる表

学のしハ学ゆふ志ひ色ふ形しされと世うゆふ

してねうれりのうれハさ色くと事をさのく

和をもとゝ為て一生涯を送りすごすむ事の
なれば志ゝし

述懐　小車乃

ゝしとのゝ人ハうゝゝうゝ
わゝ家ハ世ゝふあとゝひ
ゝ
ゝ

嚴菅

人とハ数ゝ家ゝ乃源家を
ゝれ乃ゝ
ゝ
ゝ

こしぢのくに巻第八

享保十二丁未年

元日　東山延称寺にて

我のごとなるものゝ世のいとやすかるべきたまゝゝ
一夜ばかりやどりもとめ給へる事ありとかの雲風

雲雪

朝ごとにかゝる程もなき雪の日はいとゞ春ふかくなる

雪のうちの梅

ゆきの水の梅のそれなるべし川のハ雪のうち

春曙

天地と人の心もあらたまりぬるの光やうゝとなりぬのあけぼの
大空ゝやゝ雲もおりて雲ゐにたゝむ雪の曙
風のうゝ梅の初やあ雲ゝ人て梅ゝかゝるうゝ雲あをの

行舟の詩を書きて送りぬ波やすき浜の住吉のあたりの
都出でしは春の海山岸の桜花をほのぼのと
いひそめぬ雲よ雨よいざもろともに人の恋ふる花曙
花色は色香は外に咲もいろ人の春の曙
くれぬ人秋の夜と月花も元とかりの世なる曙
鐘の音もゆるく竹の葉むる秋の月宛る春の曙
いつまでも花は咲ぬ春の日の暮れ方の
春月
めぐりあふ春のあけぼのもとりかなしてて春なの月新
山路皆花
咲ぬ花くれ色香ふかめて永日もあかぬ志賀の山越
みちしるべ世は花ちるあの乃ちも春をぬむ色
しく
花下日暮

永日も暮れぬれば入れ乃陰におとろく春のやまもる
歌花
色々春にめでさらめや桜花咲ぬ人はあくたとおもふも
落花
根に返るさてもうたてと散花を風やしたに誘ひ行らん
深山晴日山科双林院
咲散の春ひまつひても行春の名つき残りそとしめん
赤ハしそうむさ花咲散れとひまつひても春やあらん
卯月一日
今日ちて春の形ん山くるも春むる名に面て夏
十一日斎藤氏誘ひ
みかの原やくしの川の春の遊
又月雨

志ハしらし雲の浪まを晴まなく又うゐくまし文月雨の空
なれまれし宿とれらひそ彼の女ら待ちらる菖蒲のさとわれの比

懐舊

もりえしおと思ふらん昔へもう起梅志げ起彼れをまで悲

秋夕十首

世の常の涙れ露とひて袖にも阿まる秋の夕くれ
阿せ從ひ小田もる庵にのへやらそめさひし起旅の夕暮
さ飛しさもさしにハいらし日ぐらしの聲きくる秋の山陰
月にまちてくさめら旅人心や捨山のおきまゝ中ハ夕暮
由良の戸や浪さわぐにのみの浪にも志られぬ阿はれの夕暮
旅の日ハいそくとすれど草枕夕霧たる入相のころ
秋くるる秋の夕れ村鳥をとくなる聲も飛とり淋しき
身にそしむ声も露も阿はれ世のことハりの秋の夕暮 風イ

厭ひこし秋にハあらぬ淋しさもおもひくらべも夕暮乃空
夕暮ハ外山のあらし音まへてたく寒き秋志のく里

夕簾

夕暮のをちこちのいるかハ打ちるむき簾の音きゝし小田の秋せ

雨中の紅葉なりんとて

帰きてえへ猶あきぬの雨露に落ちるる山のもみぢ葉
名香をおほえ秘めをこのまし中正雅丈の追悼に
所の流乃みるにとやハおもしるむまゝの句ひ乃数をとらて
父の忘にこもりし人の玉様ハ千世もそハ舞るうち残の
めるれし宿れをそこれしかとこめし奥に出村
待ちとて
誰もそて今さ涙の玉様こめへ本来なしけきのこゝろ
母の忘に籠し人の許へといてをくるとて

いつの春とてその初茶花をたてるけきの春ふかぬる夜を

返し　和遥

たのたへ深のたえれもまたてる花たてるその初葉ちり紛きふ

古寺雪

うもれ数深の雪のこゑ紀なきて雪に沈る花窟の寺も

雪のあけ〳〵市原の迷居ふる

山河の秋庭をうえて〳〵雨もたてる山吹の雪

雪北山

うもれも粧吹たて〳〵枝の雪風ふあまきうる乃もけ〳〵さ

戊申歳旦市原ふる〳〵深雪父の上てなこ見ひ知て

のとも初代若の元旦初て〳〵に色〳〵てゆ春の光そ

溪雪ふ梅枝ちる代入〳〵

花とあ八匂ひの測とうやせん梅ちる〳〵ふ深せ〳〵波

溪邊見梅

横斜一樹古溪邊疎影時香脫世緣誠問

孤山老人意花底不動水濃漫

市原乃奥ふ茅庵をむすんとせしにさること

ようなきは

春の風をおくるうの形茅の屋もむすんとされ歳そ

賞

春雪をうて書ばこめ〳〵梅もまた〳〵つ花ある初の雪のうる名

娘子

曉八弱の巧をとに梦をへて〳〵紫雪ふうる〳〵娘人

山家花

花ふうれめ〳〵しるうハ雪つれてう〳〵人も初一春の山里

彈琴題

獨坐夜涼思未平、四絃裂帛撥塵情、林歌
一曲餘音裏、靜聽松風和水聲、

涼生四日夏嵐山の花をたづ
ねの香を誘ふ夕ハ井川をつたふ山の名もいとゆ
ゆ

同十七日乃夜燒の下ふく
灯ふるむきてわきて影をあひ影りおもふ人の世中

同十八日ふる嵯山乃花ばなてゆくんとせし
待ぞ月ふもえ谷々やらのくるしの山岳花ばなうた

卯月一日井の花墨に宿同二日玉川乃河上り山
吹の花やのうらし少ふ弱ひさてもえさ名れハ
山吹の花ばなとうたうたうたうもゆうふ井の乃玉川

同十日書清軒へうつる同十一日乃夜
明方に紙子ぬの涼乃涼しさ今夏初めの松ふゆ

文衣

花染ハ心ばせうちの色香ふて うつ屋もおもて 昔の衣の
ふ宮山ふ月ちくくふ入ち雲風をし谷乃遍ひ波
戸瀧涼の瀧のりしふ
涼瀧ハ松風をひて涼 さもちをふくの山乃景ふ
雨餘生晩涼 五月十七日乃ふ亭ふ尚社
面ち彩名社の景ふ風乃ふくふ入日も涼 景乃さくふ
江村片雨
波風もきふ入江の村面ふ洲濱乃雲ふ夕日ふ乃
蜑の花むしふ入江乃一むもかふ人ハけふゆふ乃
早苗
子苗ふ乃ハ面ふ山川あさ水の乃末

大井河通ふく
大井河さゝ〳〵ほ鮎を目ふけく網もきく淵くの篝火

五月雨

はるゝと雨さけれいを京又雲うつる月雨乃ゝ淵

五月雨晴

今ハたゝ水ゆき元と又月雨れたる日影ふ雲もおゝ七

河夏月

雲とうゝ雲ゆゝうの月ふをくゝを世れ出るゝ

雨中蟬

雨中蟬ゆゝく

雨ぬゝ久河の洲淵ふ淋しくも蓑毛ゝれくゝそゝる白

夕立月十四日小倉堤より舟ゆうゝて蓮を入ゆく

池

池ゝうゝ花咲うゝふ汐舟のふゝもあゝき家のゝもゝた

舟乃家おゝゝやゝて乾ゝり家のゝもゝ池乃荷葉ふ

舟中ふゝく友とゝるゝ人乃笛ゆゝ吹りれて

あの高も掉の音もかゆゝなり蓮の花さゝく池の夕舟

述懐

いつのまゝゝのゝれ名をもうくさまゝこひゝる人ゝも高ゝぬ界ふ

夏秡

五秡ゝゝるゝふの川ふふゝゝれもゝいゝそゝるゝ人

小夜文ゝ門ゝ月にゝ蓮五秡川秋や立秡乃森の中ふして

又月一日立秋の節ふゝゝゝゝ高ゝ

いつかれと高ゝ空ゝふゝゝ今日月日のゝゝ又秋や立人

初秋朔　吉法師

ゝゝ法や一夜過ゝゝゝゝ人つゝ紙衣乃水も秋乃ゝゝふ

寝覚述懐

なびくころ時やちくさ人行るも所社くゝの秋哀ちくさ
ハ
面乃秋
とゝ花面ハ萩なの枝ゝ当つれて秋哀わひしき秋の古も

虫

唱虫の数ハ千種ゝ日ゝれてもいつ次宝乃秋や俤ら舞
浮世ゝ野ゝ

浮ゝや西ゝ秋とむしゝゝうめてゝ所世乃むの色ゝ

萩

風ゝゝゝ秋乃名ゝ者ゝ家ゝゝゝゝ萩もゝゝゝゝ
七月九日朝晨山小倉山間迫ゝ虹の立ゝゝ引き
ゝて
又やゝん河を渡ゝて晨山小倉ゝゝゝゝ虹の橋もし
惠通和尚乃ゝゝれしゝ厭離庵をとゝひゝ

極楽ゝ美ゝ者ゝ無むゝ世ゝかゝゝゝあゝゝ出も所ゝ
乗尾山の月ハゝゝゝ
月ゝれゝゝ面乃代乃世ゝゝ仝ゝ小ゝ春の尾花や面
ゝ雅ゝゝゝ人
ゝゝ乃ゝ小ゝゝゝ
ゝゝ大和も所を之ゝゝゝゝ拾ゝ宜ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ命ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ文ゝ筆ゝ乃
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さめゝゝ人世乗乃ゝゝ小ゝ墨つき者ゝゝゝゝゝハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ人ゝ宴小古渓禄師乃常に常ものにゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
忠岑ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

芝の姿はまぼらしうるわしく井筒より似つるひろく清く
うれしとされば清香山乃石とかゝる山の井とや
いひてき

山の井乃清き砌も秋茎乃ぬうれいと汲人やく年

享保十酉年秀月まの日　似雲

同十六未魂祭り送り火

なき魂もまよふ数乃やはらけ数そ哭乃山端
乃水音より海乃きに大井川乃洲崎乃ふ
月乃出るなるめやうく
多きれ乃沼乃れ来れく山端とゝく出る月うけ
波舟うのくむとせ時ゆ人やさしくもあれく
ゆへとく月のあるこうなる指さしられを
月新のすゝふまさせてみられさ不ちられこうて秋の舟人

寢覚述懷

おとろうの数世の美を祈さめせ一志の松小陰ハきくてを
一炷煙中得意
ゆ世祭くも祭くて見一面ふ小なるゆ人のこれた
殘暑
むらくのたくもへやを記ゆ一色ハ梅の暑さも祭やうら人
月前虫
草の京宿うる月の秋小まくされまの虫の秋小ゆ人
月前風
ゆむ月小京吹風の久久てを京小ゆ乃秋ゆ海を
月前廉
景の道や出くも松の寄れる月うた紀ふ小しこの名
海色廉

なるとなくて立とやを見浦風の
籠中に出の呼ばきくく
う、房を命と鳴さのうちふを聞なひて出や呼らん
き日夏涼しに月乃外中秋乃月をれ
日数経夏も七夏八時初く名る見た月を叶え新ら
去し比天搖立ゆく月えやとあ立ゆらしら
夏風ちなしとを乃ら海ゆれ、を夜点ひやを
いきくしと海くさらせ八七夏は月ふ山をん天乃ら立

秋夕

入相乃鐘のこ告くく人と夜鹿山寺乃秋寂林しさ
山里八秋の夕乃さひ比ふ其人となく人ら引き
十八夜月
長ふかけても出る月清く秋乃なの後もらよとて

藤我五郎兵衛道孝八酒を醸せる事を家の名
ときとして世の中ふけ人みなんあり老ふ八あれ
と、神道ふ四ばとしめ音樂ら所ばら
して紙漉うさまし史その酒は俳業乃香
とにかくふ其名八いとあけの名とふ
学文ふらし一年末月乃十日ゆまり月乃
面白ふ筆乃とばんふ志めやうふ和ばさ
に其風音文人ふ面へら
乃見乃方乃北沙ゆ
の見さへ人めて能を更ひやうふ面へ
しふ間ら者とと
ゆれくこのうに立やを
おとゆうしおとやを見ゆくさへとあら

外へ出うり出ぬ人は口つきくうひうしといろこと
てうりぜんとくやおほ[illegible]をんなのうちに紙家
のうつくしに燈の人々ふやをうとせうせ[illegible]
くしはうをみあく懐ろうもをろ乗とうてこうきと
さひこれをひのおとと云くあらしにこうせよとて
のはう哥ふ
とれのうに立こそこれ琴のうふ我ふ人ふし云れて
とひうそ一をのまし[illegible]ば今人まうふもいうろう沸
うくにうおうしもん来の世ふもかく沼岩ろし市
中の大原のこさ不用雅昇昇の文を末拾のそ
れ歌れを子朝伯牙の石をにもいやさ紀一を
ハいをくまうぬ面
云くともひれし人の云れ家に学ろうろう小草の歌

羇中雪

きを乗ふも多ふの沼岩をとて杖ばれさうふ乃京
月和意
月もこれ面一をの偽ふ米ふ歌うふ家とを紀ひをを
ろめそも人ふ和歌一国のうもに月新ろうの樹うりう
八月廿六日の歌庫乃琴をきしく
おほつうる美うひうぬうあうしふ名ふ内そ紀れしこふ
咲ましふ屋の岩ふ小金山いつまし山をこさろうふのうふ
大井川乃ろうふ庫の琴を学く船諸奇
掉庫乃さふをもいそ数ろ川ろ世舟のうひよそ唱
庫
書ふのうれろうふ学人も神ろ紀めまろうのふ
養清新りう面

露ちりぬる世の秋に咲花も虫の音なくて庭につきて
月かんく
吹風に枝葉木の葉のちりまよひて風を光の旅のよの月
同十三夜三井寺にて
長月の名高き影も誰ゆへわきてそ照る三井の古寺
誹諧哥
其の名にはねともいまそ照月に誰か拜むの瀧はつくらん
九月十五夜湖邊薬師堂にて
竹生の瑠璃の光ゆくに鳰海や月影うつる夜のさし波
同夜石山豁眸亭にて
月にかけてこそまはりの遠く月も夜渡る勢田の長橋
雁尾に侍るは
数のもとにひまく游の白玉を千々にかけてこそ雁の尾の露

月前雁来
いとゝしや秋はしもむかふおりしもあれ月の今宵に雁は一行
袖にせく 依思増恋
せきかねし涙の川は行末や人めつゝみもきれんとすらん
神無月八日乃晴の夜に
春風に匂ひを桜の花かしら那
嵐山の紅葉散たりしむかしは
明日は又まつらんしらも嵐山けふにちるらむ秋の木の葉らし
安藝国より敬乃のかりてそらに飛雨らし
離房居士追善に香花をたむけ侍るとて
おもうしみちかなられて行舟の法は行には何のさはりあらん
その後離房子松井和遥丈むかしのほりし時に
冬ちや舟にかく波風にかしに風行いく吹て

舟もあやうし時
あらし波の沿るに為ふ沿舟を
少し泳しいのうやしに俄に海の面を川のうつ
て行うしうてあらうしく岩へつきあたるうし
時我れ知らずしとにはたちまちくらばきて不思
議なるうわ海路をはるかに感海を渡しもなく
いひてきしといふ

暮山雪　十一月十二日三秀院にて当座

ふるさとにぬしとの雲八雪をそ雪れ山嶺
初冬嵐
ふるさとにもたけしく吹うつ嵐の山ゑ冬八来ふり
皇紀元年
ふるまふ八ひら海もひらまれな京を夜をふ八うしく袖の浪も

鞠をこのみし人ゑ雖方
ハうつる人く遠若の為とて蹴鞠乃舎をりふ
せし時
鞠乃庭ふ面影をうつ立たひて教ふり給ふ人をうふき
霜月廿又日乃晴の美れ社頭をなりけう時
あらし沢清水を人物ふうして毎ことおも
ひしうう四方清鈴の音人乃物ふ音をひ
おとしとふうう少へけうれし岩けうひしわ
人乃とを人しやさうちうう
やうう音数清旅涼しく沢月秋
やおほへて下白八忘れ侍しさめうふひに
ちうき時しもひうまに気こ和く
聖廟乃清者ちうめとをれまうう感し

無てまつりて、　沖神号をうるべく、　奉納
の沖急仏なとや作りて多数又わきいしやう
ゝも美人の姿せしやふも
神のたゝりとあり、きてうる屋
ゆきこうたりし
果蕾
作りてあふひかこたやき大井河
くゝたち花さくれるいうきせ
享保十四己酉年　清滅の第屋ふゝ
歳旦
あゝ山去きて乃初花ハ水球生る滅せしゝ浪
為花し竹のうわとも去に的て一次ふのゝ元の花とはき
六日春の雪ばんゝ

村消の雪もまゝうて一入りなれたそひぬ去れ雪う枝
遠海胡蝶
たゝゝ消波も花ゆくたゝて落紅り春む海山
山家ゝう郭ふ生しは初て蕾れゝ色をきて春
我もゝふ岩ゝう生ゝ咲ゝあつ花の郭れ蕾乃ゝ色
任有亭に美味ばゝう　栽ゝゝ
花紅葉内ゝふゝ家ハ嵐の山乃ゝ生ゝ世
去雪
生ゝ日ふ春ゝて初ま枝の雪ゝ花ゝとゝも爰ゝう川ゝう
はれ生ゝくも初ゝしゝふ波ゝひて無ふ消乃去の波雪
梅柳　波江春
今殺ゝれ入江乃柳折ゝひ梅うゝゝゝゝ去風
梅柳ゝも白ひも乃ゝと春ゝて初去の波波江

殿中歌鳳

ひろまへをくるかぎりに新きこえて数のこう年を重の曙

三月十八日兼題　柿本御影供

山花盛

咲ちらす花の梢を雲とのみむかしも今もこゝろ〻の山

街花乃さくら詠を

とゝさうにやちくさの山表八重清者のりくむとまくる

易花

咲ぬやと思もさくめ花ゆへ紅葉ぬれ紅葉ぬれ表乃山道

花のとを入山を色きこえくゝ又ゝをくかゝるさくら

かゝさに文哺を羊に跪乳ひう人として孝れく

人として徒なる世八禽獣ふをとれりさるふ我いと

哀れき時毎ちめ世ばさう移ひていまとるも

世にハいとくもはく人事れしくゝ云の八千度

かゝるくゝ古ひうを毎ゝてだせんとうゝ哀れハせめて

そのこれゝ嘆ゝ世さ世移ひ一を毎ふ少ゝるゝハ

を移うるゝ方仁ゝ哀れと拾のものゝ毎に方をよ

せくゝこゝろもつさゝ毎ゝつうまほ毎を人ゝるゝ

少ゝ作ゝ世ゝ常ゝ哀れ云茅に年をふハいふふ

そして拾の外ちうき山法ゝ世ばのゝれのゝくれく

大和歌を毎ゝ会佛世ゝ人法移毎をとけ移

人人めのゝゝ移ゝふ人ゝ哀れハ親ゝて移ば

おゝふこゝといきゝゝいゝ哀ものいつ毎ゝ名ゝゝゝ

哀毎て人ふおゝてハゝもさゝゝゝ毎のゝ花法毎て

て移ゝゝ移ハ毎哀ば移ふ毎ゝに法くゝゝ

し移ゝ毎のゝ級ゝ花ゝゝれハゝゝ奴琴美ふ

不ぞの緒を留つくそむきれし時乃年号月日
時刻を考し二首乃歌を書くき乃ひとにおせ
ん乃やうもひつそ涙ふむせのうりけりぬ年廿数を
ふまに乃わすれうくれ世乃んさしいとと
されうくれ乃末ハ我もけらそとおもひとつと
し月を始る程ふ世のさき涙うあそひとう
へもうくれ乃ひうくまをうくをうくり
見そ世れ外ふうれ生のんられまさふさたうく
ふとハおりひきくひしーつとさたふ公ゆうく
緩ふおハなれ可もひうくをあうもひうくをもた
さられとおりひきてそ三十あまり六とせと以
神五月立待月の夜始うつ妻藝の思いつ下函
光明院あく一夜一詠乃文とうて又乃と

寛文十三年正月

の表深生のはし免つくく郡ふのうりをへる数
それうりひうく郡とれうる数山世れ色これ
さうるくを位うしかとすめハ又表世うて
ひうるうふうもひうくをうくにしてその表深滅
乃山表尾の葉ふ表さいうきれいうくうれ形う美房
をむ表ひうれ乃ひうぬ而うくふ見ふ耳ふ物うく物を
にくきくうくまう山係れさふもふハ一和ふ名
ふうくれるう大井川をとうるくしむうひ思高
ふ少えし尾の山あるにませく流う激は
激るとをふ山宿乃表の、海うふ乃人生れを或人
山房の名を任有京とうりうに迷居して
城折くうて、まハ亡母春月妙光大姉五十
回忌もひまるめられうまれハ乃とおひしたに

をもはれたそこなりとちかき云乃為ものはなくらし
ちんとこうくおりひめくらしこのされとも作
のまたこのもちしよりめ教おそのせくいやり捨
まひくるしく欲そ八波包紙又波おせおひ
ちをあ小八瀧の奇一首ひりひ欲ち家あさ形
き時ゆうるを人くく母をひそひたこ小世通
はとい小乃山ふうくへく魚きうと学へし瀧を
見城又ふきう波ひくひ滝乃むらにおほき
形ち家のちうつそのうへ形ち岩城むし詠う
られちくめくはうみしの紀筆ちとこうを
ちもうにたちひ拾ひしことおほうなな
ち美のやうにおりくく待うれたそのひうらハ
うくめしくせしものひうしハ四波ちひ

いのふと同きくてちをうしに母乃奇とて
瀧は瀬乃家ふくけて城ちを小紀世の和此をうち祭
と家ほのさし知くを家のうらぬ丹く出を紀
波ひ光れて移色ても母ふ人はれと今八ひとうく
形くきえうせめとうう待うしちも今も
その三年ひまてれうもちしりあくも波ちを八
分ふくくてきしものをと神なぬくし待う
きされ八母も山水をこのうそ世波ひうとお
ちへていと海ち滝小矣ちくたさ形ちて山遠
忘くむうひくく世唐家をいとちくしゆ小矣
うてひを戸瀧瀬乃瀧尾の出ちくのし
ゆもり小ち世の和世色ちとおりふも海
此ゆちうひ奇乃三十ひうう二文字城

今毎月のつゐ末の日乃終りを記すべき事

長歌

毎年ゆらうとはきも日数乃過ぬるを留乃月くゐなる世界乃事、数増ちうひ乃毎地まちうまれうる梨きくゐひ乃きしうとは記ぬ澄乃ふるれぬいそちまめ数にゐまちう乃数ゐむくゐ法数てうまも弘きはてん乃雲数地うひの寿もうきしさとひぬよに新に立数

乃至数聲
うくそ形数
ゐう地収れ
らとりう数
地乃の英城
もゆ数かるる訪、

はうふりとむ数
のさゐされ文城
かくことと志まま
数しいと乃ぬき
ありひきえう、

世乃年百乃年忘もまきうぬ
まとと世うゐ心うつらふ毎ちうも形又ちう
乃ふう波花のおうくゐ表死ちむとあうし、
西行上人乃忘日も乃ふゐ訪まう大和立訪
こ世捨人おかうる中に世上人を記くゐ
比ちくいうくゐひ行うきや川うれも訪うこの
免事、城忘日とさうめを記くいる方ちう、

双園のうしろ形から西光庵あり　葬をいと
おうて

あるも多く紀のひとみて先祖なる人の外は所へ行るとも
なる紀ゆゑ辞世を人とゝ南無阿弥陀佛〳〵

享保十四己酉年二月十六日　　無心拜

右の一軸の裏に一字十念は尊號をおほくかゝ
けり〳〵奥書あり
此一軸表うは法〳〵形ばかり云は紫はけ〳〵裏ハ
滿德乃当号をかきつけ〳〵祖母てまつる誠ゝすゑ
の心をかゝ〳〵三毒の輝り報ゆゝ待まと
かゝる昇結もさゝ法を種ゝ和尚と念佛と表
裏にゝ二つならされハ利益なもむる
うもと名母乃追善悲歎のあまりんゝおり

を拾腐要〳〵霊前にそなへまつるの
ゝ〳〵過紀言葉をかゝ〳〵あそハ人人乃まハ
此の向茅岩笑茅とやなられまし空ゆれうく
まれと沐浴〳〵なるし髮はかうゝ小さくゝめ
て右つれゆのうる人乃詳へはのうとおはおりを
西光庵と号帰嚴和尚ハのつゝ東につくゝてのお
ひなハ兼てなり乃のの白又ハ沙を清のなるし
さもとおりひて此樣一木はかつて栽を紀なるし
このなかにさめまいゝをて外ハ石一つも出へまゝ
しやるゝ光れとさとぬらそ風流めるやゝなる人
もとうゝくいるゝ中れれとも行くれとをしゝ年祥
うひなひをれとハなけハ根こしをそなん又心な
らすゆゝハされうゝ少なゝ

似雲

花乃比

おもひきや葉はこの世の春にあひ北山乃花をうんとハ
なりし山花白毋く咲乃花乃枝ハ咲ぬ人のやさ
しさ
山ふれ路ゝそ乃ゝ立ろひぬ白毋みちの花
面影そ花の山ゝ立ろひぬ北山乃花の姿へ
こゝろ雖花色香はなに又影ひろし北山乃花の姿へ
子世ゝけるゝ乃ゝ山に咲花に染ゝと滝の白糸
咲花そほのゝ白毋葉はなの明ゝ月も素ゝそ
山里に咲ゝ乃ゝ花みてもおきまれる世ゝ世ゝ
所ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ花ゝ咲ゝて花ゝ乃ゝ
海面ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
物ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ白雲ゝ面ゝ咲ゝ乃ゝ

の立ゝ雲ゝ乃ゝ花ゝ世ゝ乃ゝ山ゝ花ゝ咲ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ
織ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ咲ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ

梅花

花乃ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ

古寺花

ほのゝ乃ゝ滝ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ小泊瀬ゝ乃ゝ山
滝ゝ乃ゝ音ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

時を感して花も涙とぬれ乃ゝ中正
雅丈の新を深瀬乃第ゝ居ゝ乃ゝ
えもゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
山奇八居ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
をこひちゝと繁り面ゝ花ゝ咲ゝ乃ゝ
はうゝ人ゝの新ゝ乃ゝ

蓮花

を誘ふ風の沿来ればなるむ[illegible]八の[illegible]めるを[illegible]清る渓雪
安藝国吉村亭乃蓮咲山れ毎年[illegible]池の心
[illegible]もけらしとあるひやりて
竹[illegible]やまとえぬ花の面影もかすかに池の蓮かな
耳[illegible]るものをなを[illegible]合佛の行者ふ
[illegible]てをしりきれ
[illegible]やまし佛の沿名を[illegible]れ[illegible]きて世ば[illegible]
去れ[illegible]
[illegible]て[illegible]の[illegible]鳥のしねうも沿[illegible]ものと
寄虫述懐　[illegible]諧哥
[illegible]
蓮春花

沿去も[illegible]やはらへ咲花乃沿[illegible]心沿[illegible]沿[illegible]めて
[illegible]
卯月一日蝉乃鳴をあり[illegible]
[illegible]ふ[illegible]友と呼蝉ふ[illegible]
同三日武者小路之位公野つ[illegible]
[illegible]やまし松のあ[illegible]も[illegible]
返し
[illegible]心を[illegible]乃木[illegible]人乃栖ば
[illegible]
山[illegible]
人佳郭公
[illegible]
郭公

秋はつゆ　はるとも　なくて　時鳥　なき　一聲　いつも　ゆらん

八幡山神應寺　はる　古法　禄師　附　偏　あり　しも

はる　祝　し　面　て　まつり　て

石清水　神　乃　あ　く　設　せ　し　れ　ら　き　く　寺　れ　法　の　る　れ　た

戸　無　瀧　の　瀧　の　ひ　く　り　り　て　郭　公　れ　ひ　ば　き　く　て

下　る　こ　る　せ　乃　瀧　れ　ま　ち　く　り　ひ　る　も　る　紀　山　郭　公

水　鶏　ば　き　く　て

ぬ　や　と　紀　行　の　あ　こ　て　れ　秋　を　こ　め　て　面　く　く　水　鶏　八　月　ば　こ　と　の

星　か　こ　る　の　る　き　こ　の　ぬ　宋　の　て　八　面　く　こ　て　れ　鶏　小　ぬ　ち　志　の　め

箕　の　寄　れ　中　り　り

ち　く　と　も　ば　ち　り　ば　り　る　い　ば　ハ　行　乃　流　葉　乃　さ　こ　れ　の　庭

撫　子

ち　え　て　ひ　ぬ　今　一　坂　の　ゆ　ち　る　山　ぬ　ち　と　の　星　八　指　こ　て　え　る　ち　う

大井河　雲　螢　を　ふ　く

大井河　移　毋　の　う　り　級　て　人　今　い　り　て　光　て　ば　る　面　影

夕　立

時　の　ま　に　浪　白　浪　色　と　て　ふ　こ　り　ば　夕　立　の　波

蓮

面　ち　く　池　の　蓮　れ　立　葉　ち　り　浮　葉　て　か　ば　秀　の　涼　さ

秋　夕

さ　ひ　し　ば　ば　て　ま　ハ　人　世　の　う　紀　め　て　ぬ　山　瀧　も　秋　の　夕　雲

う　紀　塩　な　れ　ぬ　袂　て　雲　深　雲　夕　秀　ふ　紀　山　の　う　れ　の

並　河　氏　乃　母　あ　五　月　ふ　小　才　面　う　て　し　を　み　月　半

に　ゆ　く　追　悼

秋　て　も　て　な　ば　か　し　ち　ひ　む　あ　五　月　ふ　つ　き　ぬ　海　乃　嘉　の　衣　を

秋　歌　中

庭の萩うち靡くもはやはつ秋の風
夏の月を山路の杉の葉ごしに見て
秋の夜の山は霧深く万代の秋もかはらぬ松むしの聲

遠村蛩々

遠方の蛩の音にまぎれて聞えぬ秋の山里

虫

子日せし野べのなごりの秋もまた人ぞうらむる松むしの声

別後

贈答

心道人

高標不可忘山頭孤月發清光

嘲々西斎夜雲外風飄桂子香

前韻

忘れじ今宵は月こそ光るらへ刻々の色も香も

八月十五夜大井河に舟をうかべて

大井河さはやかに波もうねりまさりて名をなつかしむ月のさやけさ

去年八月廿五日大井河さはやかにて秋の面人

野べ之夕ゆく秋の虫の吟

世に忘れぬ人の吟

八月廿日秋宮家にて法華の

月前懐舊

七夕

七夕の月を待て月しうることいひ云のて

秋を待て月をも秋を待て月をも秋の光

秋七日古曽部の伊勢寺小祠に伊勢の

かくらんかな

寂かさやかくらんのこゑ花のうへ美濃なる云のて

能因法師の墓にまうでて

云の業は秋を待人の古墳

八月廿日中山寺ゟ眺望して
四方ゟ田面乃ゟ清水ゟ流て徳波みつく沖はしら波
九月四日波岸中日天王寺にまゐりて西門の
額をあゝ奉拝ひて小
なゝ小ゟゝも忘れぬ小ちゝ乃入日ゟ見ひてそゝ
同五日難波を出て三日市に宿同六日高野山へ
乃ゟ七日金剛頂院ゟく　院主法淵
詩歌あり
春さむ見花の元さゝ乃ゟ枕ゟ乃ゟ秋ゟの出ぬ月
宿高野山摘金剛頂主人和尚　芝林兼堅
未字奉謝
包笠来投祇樹林連床清話始知心
優游不是人間境澗水松風捻梵音

顔をやゝけて　似雲
暁乃境ゟゝの月ゟ高野山　笠乃末松風雲音
亡母出ぬ世ゝ　ゟゝ　ゟゝ　ゟゝ　ゟゝ
高野乃奥小網めは　ゟゝ
対ゟ一親のゟゝ小数髪やこのほゝ乃袖ゟ　ゟゝ
面ゟ比小の源氏恵のうゝ小ゟゝいゝのゝ人む恵の玉ゟ袖
文ゟゝ親のゟゝをおさめ重て高野の山をいつる月さ
新　高野ゟゝ　秋乃山へを
白雲ゟ小ゟゝに消ゟゝゟゝ　秋萩ゟゝ数秋の河ゟく
河辺
山の名ゟ朝日乃新ゟ立こめて色ゟゝゟく宇治の河辺
野月
見ぬまゟ波茅ゟ家を吹風小月新ゟく小整ゟ無京

閏九月十三夜

墨つきに恨もうれしく世に二度めぐる今夜の月の影

月前中

月うれし心も老もいとゝ秋乃ゆゑ

秋乃月小松原のうゑ

大井河川音ゆゑ月影を井せきうつす白浪

伐木丁丁山更幽

をれ高く少へて立る村雨

尾花を見くれ山迷ふ

野ゝ高き村雨をうれしく秋を田ゐく尾花乃独ぼき

懐舊

思ふ事おもひ出もなき月影にむかふ一つ涙

述懐

立ゆくすゑのこゝろを早瀬川きのふ乃しらぬ波

後ゆくほど乃ゆくへ知とゝ思ふこゝろ

元明ゝ月夕雲のこゝろ

月やゝくゝ心ゝ月も晴やらぬをゝの山を雲こめ

秋乃歌中

紅葉ゝ秋まの志ゝれの高つゝ

ほの九月廿四日高雄山紅葉ゝ

高雄乃ゝ秋ゝ彩ゝ

ゝ月ゝ

花ゝ月ゝ

世ゝ秋乃ゝ

山家月

浮雲はらひ風もうち吹くに松の戸ほそき月さゆる
和泉浦やの田露はなほ立てわれはの志ぐれ
国九月尽
七月のつゆ秋もいとはに事ぐさりの入相のこゑ
河落葉
紅葉を誘ふ河のはなとかいうれ床もあきぬ
落葉浮水
なれ沈みものうふ人のさゝ流もさゝふ
寒草
うまうえや来ぬ草乃志ぐれに相風わるる吉れもさき
冬二月中
所れ来ぬうゑ稲くまセのうもに二つ二つのこゝなりのも

沈ゆり咲吉も寒し　小夜ゆ吾山川ちう紅葉の秋景不

歌霰

誘ひこ寒ふ吾く国のうに志ハ一義の吾七面ハ秋
う枝吾もくけくされやにあ志くるる吉れさや
元冨ちう三ふ（きんもこ寒れと今ちハ法きりて
梅なん野ゆの志ゝ雪と吾ふ色に
雪のこう梅う家ゆもわれれ小紅梅の花れ色ゝ
散ゆて雪の河ゝ我七むゝ山をあひ色りく
梅ゝ吾る法ゝ七ん初散ちう山をうゝ吉れ山里
散ゆて初雪ゆうし法
時乃ゆゆ河ゝ人乃法ゝ吾ゝ　ゆゆ紅葉の初雪
冬二月中
八河も鶯七咲ちるゝ　ゆ紅ゝうを河ゝ　ゆ山陰れて

吹おろす嵐の山の滝の音に枕もこほるあさのしぐれ

寄秋月

池面ちかくふもとにかすみたち（てかなたこそ月もこほるら）
神無月初つかた（ふかくしぐるる山さとの）
ここうの方面のうしろ人乃告きれていうた
波高ふかくひまもなくて
きそこれを神を時あく嵐山人乃世をさたの高り
雪ふりなハうるくしたと繋りをたしーゆなとを
ひいて
無人来と消るもいさや白雪ハ物くふ孫とひけるなき
世人来あくまゝふと今ちハ乃もも紅葉も深ゆそうむ
同月日三七日ちうしのハ天龍寺を祖師を
ちゝめ浄居ゆまゝ飯尾ハ棲廉三秀院ゆの

つまりて仏事御せうれしつゆそふひうし世の
ちちうとそどうくゆるの云ハ葉をけうう
事御を
なれ来もおゆひのけきや云ハをの数ひうを友ゆうれ人とハ
今日ちゝ海ちうをゆ為ゆ寄ゆ百き云ハをも風
竹人来心つうゆ世ゆ海ちゝ戸紅葉の滝も書むせ物ちう
庭の芭蕉ゆ生ー世のゆ伝ゆて詩の物うれ
ゆなうて
ゆくし所乃今ちうくうとちうふうゆ風のを世を沈ゆ云のを
来月七日書乃ゆくゆ墓ゆ海ううて
数ゆ書ハ友まゆ山陰ゆ人ゆいつちゆくん
海ゆ物ゆ来ー法ゆ色の所も友まゆ書の影ひをを
白雪ハ海ゆ苦の下ゆ也ゆ名ハうれぬ人の云ハを

市原にはさくらんとせしに　はじめてさくらの事のはつ

春の雨をはくはりの形ち茅の屋も結ばんとされ山風に
やどはもさくらの雨はつのの山飛尾乃山もとに荒のこ
り毎ち屋のはりしつ月ふにまさるとさくさくいろ入る
もとりに志つくひすみ色彩すまく心さくるの中
おのやへしまおりの山はくるはくるはなく
市原にうくはこ紅葉もまくらの世のさのと風吹形ち
稀ときくく浮世の風小山姫ちまく形ちまんと役とて形ち
うきふしいつやま志乃やふうくに世ちられて志むかもも
海色雪　色てた
雪とまきはりの海ちうくまくまわる数はいち海山

木枯

紅葉はちこまをはちを（枝の）花を松もちかり枯木うちしの
雪はるくく
晴やら数月彩ちうる夜乃雨小法の月も落紅葉まれち
雪中乃梅を見くく
咲ちの乃ちこの月ちうる雪のうち枯ま木立も梅の影ひやあち
十二月十八日立春なりけれ
去八ちん振紙の月ま枯はまち蕾行色ハやうこ雪も
累蕾
梦毎ま乃ふ色とおきこ寝こうち
少しして蕾めち入れ乃達

こしぬけ草巻第九

享保十五庚戌歳且

春ふかき物もこけらく切れ子世の数とり小春尾の滝
戸の生菓乃一周忌みたまのぬまに西光菴ゆく
ろうや爰ゆ花とり又なりて又きけり花の花の末世
二月廿七日雨後戸瀧の滝乃花を見て
次の西れうそふ花も咲ろひて明ちこそ世の滝つ岩波
岩山花のさうりゆ花ひつり北山乃花のさうに
日出れてもう紅葉ゆ又影ひつり北山乃花のさうに
又月廿三日乃次斎翁之成吹とこそに羅波
のうろふ松出しく
明ちも羅波乃めの紅ゆめて毋出源き浪の上北月
思意

こゝ数とも人まちとれ意変をあつ
幾年ゝ四ゝ[illegible]ゝ[illegible]意しさ[illegible]ゝ
泉州法性寺浦に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

野藤

[illegible]
浦月

浪[illegible]

十百首和歌

什寄数二月初ゝ八月上旬迄詠年
風早三位実積ゝ被加跋下ゝ冊子外ニ
有巻混雑い故者之清書八石山寺ニ
奉納

宗のゆめ乃

享保十九庚戌年神無月十二日ゝ同
十七壬子弥生晦日ゝの記行上下二冊草
稿あり本書ハ実積ゝ被加跋下石山
寺ニ納巻混雑い加省之

三公不換此江山

月数を入れ[illegible]

十七年卯月六日、市原[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ふうそさけ橋紀を香八去のまそ[illegible]て
同廿三日晴郭公をきくく
[illegible]をあつ[illegible]の祝さめ[illegible]ひけりて鳴音欣山々花山郭公

落紀

ちりてくく花のうきめ[illegible]せしや[illegible]吹たく、[illegible]の去阪
金剛頂院に宿し生駒嶽院流を湛渕師匠
放人いふ[illegible]ら人我宿の池の蛙[illegible]れ[illegible]
[illegible]しし過[illegible]
宿[illegible]蛙の鳴[illegible]れも[illegible]花[illegible]の池
丹生社といふ社人乃家をいかに[illegible]今
代[illegible]けつきて相思[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]大和[illegible]

[illegible]のうちにおれし人乃名をつきてうけ[illegible]奴家を代[illegible]小巣人
後五月二日清地坊[illegible]て文衣
友のきてたやをこうは表にうこさら紀山の花乃衣を
同三日三宅政常許[illegible]て立春
新玉の光やいく日本を神代のまゝ[illegible]去や生[illegible]ら人
同五日枕流亭少く山紀源
阪をく所の茶山に住人[illegible]を[illegible]世やうく人
同席少く二[illegible]所[illegible]おい生出[illegible]
[illegible]れて光ふけきて祝の[illegible]ものあと人[illegible]
孫[illegible]世[illegible]一本も[illegible]
後五月九日桃谷好古亭少く早春雪
吹阪も少く誘ひく浜書[illegible]去の[illegible]
粉川寺演守清社奉納[illegible]坊勧進

神祇

あさ日や粉川の水浅くとも　あくまで清し丹生の宮神垣

六月十日神峯山大門寺ゆく　納涼

きりさはさらぬ吹風の苔もなつの山寺

日ぬらす雨をしのぎて

来るとなく玉帚川あふれ　なつめ出てしたゝる川つゝ

日十二日清水寺ゆく

夏のよも涼しき雲ぞ　清月く絶といふ滝の底　清水

七月十日　仙雲法師自奥来帰云又將之明石中秋　大潮草

賞月贈

仙臺香澌五城楼　聞雨山川入壯遊　此去

東看明石月人間　能得幾中秋

絶波あらくしめて大湖禄師小詩　数行

此去東看明石月人間能得幾中秋と　おもふ程

なくしく金玉の末代字　仙雲

なこそあるべきなれの月なれ　紫乃光　絶波江の秋

同八月十日波岸の比　たちまちに

坂松山一心寺日観殿　八月十日

絶波て入日の影さしそ　世ふる海もうつ海　海波は

八月十日次松あるく　次磨あの山　南海

須磨ゆくて月影さしそ　ふる不　海ふく　松をいつの　ふれん

法皇崩御ちかくまし　海華遊乃　花つくこと

ちやうあく海きれた　ゆるふ　早　さを奉

ちれやあるもちろこの天下　なんく　ゆき乃　ふ　ふ

ふ　ふ　ふ　ふ

御棺前にて御焼香ありしときこえけるにも おしはかられて
冷泉中納言為久卿御筆にてうつさせ給ひし短冊
不筆にてかゝれける返し
なべて世乃涙の雨も墨染乃袖にはいとゞまさりけれ
小短冊に短歌風早三位実積卿よりも返し
夜衣いとゞしほれけり涙の雨と降ぬる時乃ほど
右五首乃御詠を拝しまゐらせて
かけまくもかしこき文にもなき袖の涙乃露のまさるを
流るゝ奥ありければ 或人慈鎮 一片孤雲出岫
流従容天外已三秋 西山此日帰来處
風情ある尭州と有し末の字をまてに偲て
有識も在もさもなりてちかき境竈をまつ
九月十二夜くもりてまちし

きのふは彰ともなかりし秋もなく長月の夜
廿四日石山寺乃紅葉見んと
思ひたちて宿を紅葉もまだしとてかへりて石山の秋
見べきほどに紅葉は
夕暮の月見のほどぞ木の葉にちる石山寺の秋のさびしさ
同し比
所にて見し人の秋も秋の都に夕暮をへだつる乃さ波
時雨せし比夜紅葉ありし
紅葉の時雨ふりしを夜もなほ秋の紅葉
又のおこさ
秋の夜もふけまされてのきにしぐれ 山家ありなん
盆石記
或人云めまをし盆石を並べてあそびて我に語る

さてその形ちやゝ〳〵さきへいてさきさきに富士より
似つよひ物にて富士岩といふとそこ
れをりて物をひろれてをのつゝ進れの石にこい
詠めて家もうの母人のものつきひにな世るふしの面を
まわふけ物ちりくさしこうもくおりひめくせえ山
あ不二嶽中にるゝひ物き大嶽岩寺れ机上ふう
はりきく形なうゝ千里乃外を知天の風ふるこ
とよ見るんまり詠しの地を縮るゝれゝ世ゝ波
山姫の玉しわさに紀せるゝ者ちりゝむ言乃
明石のと口さきひくまま立海苔あ面ふ海よ
ゝ見ん言面彩ゝ物さゝ行ゝ世ゝ誠ゝ未曾
有の奇物ちりゝ山ゝいつちゝ名の文字ハ不
二石とよ物かく海石ゝ世れゝ紀ハゝ形ゝ

ふもいさゝうそひなんの志ゝの八行れと大雲のゝる名
言紀霊石りちり元ち詠ゝ云れ業ふし
ゝ紀筆ゝ紀くハんやふゝ世ゝ
石の光もきえれまし石を四ゝふいるゝ
こまれゝく海まとせちふ
てを形をのもきゝつゝ山雲の根ゝ面地も及面
きゝのなゝ称ゝ名さん雲ふ似ゝるも見まゝ
ほき形ゝゝとふも言ゝゝすゝ詠きてまれ
絵乃ゝにきさめゝ苔の上のなれふも
ゝとゝ後ゝゝん人のとときゝもゝを紀ふひ
形ち老れゝさハれゝ要紀ちて
時ゝ奴山のゝ者やゝ者ゝ
述懐

心ある人の家より出廬せしかと問はれて牛の小車
奥州松嶋天麟院へ参りけるついでにて嵐山の
紅葉見にまかりて其興あり
紅葉にひかれし此山の秋をよそにて松嶋の色をは見ぬ
蕉窓雅友か草庵をとひて小亭寂寞室
悠々大堰河風已老秋檻外青山紅葉色
水雲相映一時流 心にかなし未の字はやくけて
庵ちかきころ此流の水にちも紫に初の色をそひてなりて
細谷含玉軒小君し伴ひて
不思谷やかよひすめる水の音や絶え乃何れ世の葉も知らし
大嶋喜庵老翁の所にあり年経て
老の波かけても千とせを祝ひしも八十八歳や限りありけん
述懐

老人ていつころまで此身やら隠し心なる人の中もろひつるまゝに世わり
享保壬子小陽七日偶訪任有亭　似雲静主
昂負一律以博一哂　北峨山房覚天
方亭才構倚亀峯隣水嵐山入竹攏三级瀑
懸恒散雪千株霜冷半零紅波心臨見浴飛
鳥橋影還疑起臥龍門外有時浮筏過題
吟都任主家工
和前韻
遍戸灘菴奉贈　似雲老師斧正　菖溪夢禅
浅からぬ心をとまる山水をさそはれてうつる人をも工みり
身經紅葉隨流水心淡白雲歸翠巓斗室
既無聚螺鬖笑他木訥飃炊煙

無あもしてふハつ久し木のくれなゐ揺あり無く栄の煙ハ

和前韻

又

楓葉偏交松葉靡灘聲時帯瀑聲頻主人

襟度都如洗却怕風光惹俗塵

和前韻

稀にも人乃為にもさくりし形紅葉ちりしく庭も其墓

十一月十八日此暁雙園乃かたり西光庵にて

おき出くるにしもりの八重に月影のこる落葉乃雲

友雲禄源我草庵をとひくるひなきさそ云

の葉も大井河辺のふもと庭もおかくしまおり

し返しまて

庭にとふ人もあらはしの此藻川に見ル人しこそたて

覚天和尚より炭を無まいらしけるおくり山にさきさ

をさそとおりひやろくふらくそをまくれ禄やの無き

炭とおりしに報ひる人ほとて

さゆ報来も炭さしくくおりし山ふかく恵とむする煙火

流水寒山路添雲古寺鐘とい句題にて

溯流游もうかる岩ほのそを住ひかく入雲を入れのうる

祖元老禅師の遷化をいたみて　長福寺恵柱

禅納へまゐり侍し

まく来乃梢も霧葉林のと人乃心のちるらん無や見舞

信州一當智圓童子ハ年あまれるつゝに在し

世りハ大和哥をよみ乃こゝく心さしいとやさし

うりるふ夜此比世をさりしとて無くちかる乃

りしをりけ比の後りみえて世何りさりまゐハそめ

返ることに

梅ぶれおを云ふ乃あかさそ涙のつて袖ぬらすらん

合玉老禅師の周忌を追てとて久善院殿の

いろきふ守袋に入しちいさき三衣れうに忘れ

をたく又のちのこころうきまうてをぬれおもを

きしてとたいひるるくるひえせハ

老ぬとそわれむりの法のひ今うけぬ名れくやしさ　蓮天

返し

佛をも我をもつとに教ふあるさうへき法の衣くふ所

享保十八癸丑年

年内立春　去秋凶年諸国飢人をくるしの

なくく世のうに事去けきふらくらも行を去や立人

年頃

ふ物ものうむ〜れ去ることうても六十一を花所ハ老ゑ名り

月曉寺亀山あらく壺を盛を養ゑをりく

時も時雨も不養も養あ　やしき盛を三ツのちし物

年号

あらしふこうを世れ潮ハ水でも汐年波乃淀むまを所を

去盛の二月十二日西汐上人乃古墳を多つ〇えし

に又今〇日日弘法寺ゑまゑまゑて名袖を

法をひくふらも家ふきふ塔や又袖ぬくを月の法

一本の梅を多つを汐くく塚のわをに人物をを

一本もうくく梅をを〇ふやわ後の世をいひをうを

一本の本に法掘ゑりを歯ををくく埋ゑ物し

つゑ紙ゑ

西行法師ともなれば古塚に植ゑ置けるもうつむき葉も
家者のむさうの形ちにて花のうゑこゝろ殊
奥へ行くに別れ行く人こそ名残をおしまれて
折をえて咲きそめるものを家揚いふにたへて人の行くん
　　維波樋口　正陳
返し
惜しまれて人なるこゝろそしれ者とくんとそまの花のちるを
　　西雲
同
旅衣宵ばれされども四のこゝ花のあるを北の山の北
とし久しを惜しみこゝろひつゝまれこゝろ人の維波あるふるを是
立惜しむこゝろを旅衣なれば惜しまれぬるこゝ
三月一日羅山乃花ばなりこゝ
　　ろ

英今雲雅花もはらといそぐこゝろの成めるを惜しむ
五日芳雅のむを西雲師とこゝろふるこゝ
咲ちぬれも世のこゝひとこゝろしの花の本法こゝ南無阿弥陀佛
十一日茅雅の奥苔清水の庵に西雲師とこゝ
一夜やどり侍しに
苔清水むすぶ水を命あるこゝすまや今もこゝろの奥
深さこゝ心法の苔清水百こゝ枝と水のこゝ
こゝ雅や花ちりこゝ苔清水むすぶ神こゝ命こゝ
ちむこゝも惜ハ法し苔清水可手に山路こゝ風木こゝひて
折しも夏れ山もれこゝ
深夏こゝかこゝ神も折惜めこゝ花の名ふ花こゝの奥
やこゝ出しこゝ古こゝ心ひいて
位こゝ誰ハまこゝ世茅雅山やこゝ出の花の本法こゝ

今日はにくまれたまふ苔清水すめるむかしの人の心ぞ　西雲

いつしかとはなくて

苔清水清くれなゐなる雅山三世住職の人の法を

苔袖律師ときたへし世捨人の法の花ぞ

さらなる義淵の乃小つさしの清うされた花乃

ふるさとの雅山の奥にくちる宗の房ぞ

法ひとすきわれに栄祖あるこれひて享保

十七年なりまり六といふ秋の頃方はうなんとせし

或人ゆゑ世ひとく家世ゆゑ世捨人ともうも

ちてさされとう報恩を考へ一生の表れ

花をも給えしかもんとれとうし雅山のひ

なられとく涙くく息は絶てなりとそ家にはとは

ゆとと見をゆ人誰ゆ八彩小神ぞあはいさん然人ゆ

彩彩ゆ有考人家ゆひとそれそさゆ山

ゆおとく清しさゆの頃大原や小雅の美れ戸

ぞ出くさくうこと彩くれ折しもみちのく

くゆくそのこと音れ北海の高ふもきく

お乃彩の清ゆお乃ゆ家にも考ぞ花くしは

小さとしたうんとく苔雅の山ゆの乃くしに

とゆくくあくとゆ人くのうくしに乃ぬ

人ゆくくなりてせめくその法

をくふくやと尼くうくえ谷ゆくゆくうう

彩く求れと彼清の信ゆひ一唐ゆ和

うく世とくれく花をゆはそのうくれゆく

彩きゆ彩ふもやこそ知とゆ山とゆ乃しく

たちく侍るとて

ひきやめし花ゆゑ春を賤くとも
今はさて花の盛ぞ侍るべく

牡丹

落花ばかりの
はりて後雖ふるとも人こそ
見をきて

牡丹や四社奥乃花のくれなゐ

ちりぬとも詞の花さくらんと
侍るれ　洛城乃苔庵の
侍る人花のちらされ秋はさらに
と詠し侍る

牡丹

初ぶくは花ゆゑ侍る月雪ばかりなせもきなせも
又うへし
ちるさくは春はれ山ゆ侍るまし花ゆゑ月雪のち

侍師似雲とゆふ人は奇乃人にて後世業捨
の侍まく和尚奇ゆゑ舎得　拾遺人ときなく
しこのふるし　花ゆゑ山のわり山く
をうゆゑ侍るまし心のとまり名ふ山
ゑ山居　侍る或人乃侍捨　業侍ばかり
ら山　籠利おし　れを帝もつ　ゆゑ勝れ
ばかりを侍師のうゑ人をうゆゑ侍るとて

義遍

侍るまくまもう紀世くゆゑ山をんくゆゑ三業乃の奥
の色

業雖ふ人乃ゑ　（上枝ゆゑ）ゆゑ乃外に侍ゆゑ

義遍

乃ゑ人乃ふ人乃ふ業乃ゑ　花ゆゑ花咲ゑ侍の山

返し

色香なき家元なれば浮山本とさてこちらのこゝろ品さん

草菴ぬし

玉の緒は絶えもしなんと思ひしに昔の黒根の末むすび置き

置きめぐり行きてうゐの子の芽吹くを咲ちるを乃後乃かなしぬ

芳姓や昔乃枝乃かゝるねとさゝ絶ハ拾ふ乃ものこゝろ

花はなほ乃ちきく

一枝ゝハ本法主宿の桜うさ絶も拾ふ者ちこちらの山

さゝ乃ゝし乃も咲くとりぜ乃ゝ山ゝ衣毋ちうゝん

落花を主ゝく

いゝ世人風ゝ乃ぬ者も未つゝ心と絶きこちら拾の花

蕾哉の句

芽ゝ行ゝ奥ゝ乃花主ゝちゝの山ゝ衣毒ゝ乃絶

絶りあれと芽姓乃心も去ゝ花なる花桜ふ蕾の時

告初し百花乃ゝ色ゝ乃ゝ去に乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

子の人をきし牡丹乃花絶ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

咲を拾ちし人乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

見拾絶の親のおりひのゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

義通

芽ゝ乃ゝ芽ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

似雲師の草菴ぬしの乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

初乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

初乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

自主乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

小蕪物も乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

あまり不思議におぼしめしおぼしめしなげくに
そと弱くなられた明暮れにて仮寝をして
二ッ三ッとなりあげくのはて送りて九月始め
月の光乃やうにひとひら片袖はらはらとこぼれ
落ち又新しき思ひ涙の雨にうるおひ乾く暇
なく思ひ乱れ涙の雨にうるおひ乾く暇
なくもありけるかな

八十三歳　義遍

思ひ乱れ苦の海にむせびつつ
うへ
むせびつつ思ひ根乃末深き
ながれに流れ流るる数要深の袖

或時百姓乃山里に行くに三ッにわかれたる捨子
はいもの乃うへにはいわく呼吸もいとまなしけるを
しるべきこと
いやはるかにいひけるに
さもこころをとどめられたる
くるる事なき宿
秋乃夕に犬の声
胸つとしさうりく
明
うさいなまるる時の
なもん少々おりひきつつ
一遍の仏名をとふ

いかろうとんさのあまりに世はうかハ捨はつる私のうき沈つ
なんて世の長おほうるゆゑにしもいと悲しさうり行のまきん
ハ未もおりひ出さくハの為ゆ南無阿弥陀佛と四回してま

卯月一日

夜きぬとなを今新しくハりてもやはり世の奥
ゆかしき所の名所も尋ねハ名や為の紫ハ所の数三等形ハ山
九日の夜性遍法師来
ハ西しく作りてきたれを竹しこのきつつやとみて
附
作りきたれ和歌いきつつ人待ふ人待ふるすいつきてます
月ハうく
為業なりは月新も絶つとて山むさ(おき)ゑ等形の山
十四日ちしめく郭公ハきくこゑ

去いろ一揚ゆ校ゆ扶ゆ之ゆ此ゆ世ハ山ゆ作ゆ
ゆとこハ人ゆ見ゆ新ゆ世ゆ高ゆにゆ草ゆの、山郭公
ゆ世ハ山ゆ作ゆ澄津の文のむしかゆ
ゆ第の戸を学ゆ所ゆ弱ゆ山郭公月ゆ帰ゆ
亡父唯笑居士ゆ
世ハいゆ心ゆ者ゆ上ゆ
世三年一文字ゆ
愚新を三年三回忌の寸志ゆ
ハ代ゆ年の齢ゆ
ゆ(をく)ゆ云の業ゆ
いのまゆ世ゆ
ゆしゆ
ゆ

子孫あり親のありしごとくなれば姉の妹も妻帯すや又舞
台の世もとうき都もうるるこの世も又後の世もいかゝ
ろ命をいつまもたゞ草の露吹く風に時もさまこめし
をれくゝとて実ばかりなるこの月をとゝ法師の法師
こゝ仏乃為の八人衆生あるこゝ世界ひかりの八ッの拍子も
をうなれ毎もこゝ仏乃為るこゝ先こうの人をとゝそこゝ
れ紫ゆ色変ゆるこゝ月の雲ゆ世乃ちゝれさゝてあり比ゝ
くゝうゝ乃こゝ仏いゝて法の法の拍子ひの私ちゝ世界
ゝて人世一芸八法ゝ法ゝてこゝん乃月やすこのゝこん
ゝ衆一形ゝ世のとゝきに仏ゝ世ゝ世ゝ人乃をゝき
むつの乃ゆ後ゝゝゆをゝ海ゝ一ッゝゆゆいつのゝゝゝゝむ
ゝも仏弘きちゝいゝ罪ゝゝいゝゝ捨ゝすゝへゝ比ゝ
をもゝゝし法ゝ八ゝゝゆ様ゝ仏所をゝゝ法ちゝひゝゝ比ゝ

のちの世ゆゆゝゝ法法の乃ゆゝゝあゝ八ゆゝ墨染乃袖
法ゝしゆゝゆゆゝ仏世ゝいゝゝゝゝ世のつゝゝなゝゝゝゝ人
ゆき法ゆゝゝゆゝゝゝゝの云のゝ八ゆ乃ゆゝゝ法ゆゝゝ
らくゝゝて世の楽八不ゝゝゝゝゝゝ極楽乃楽
なけきつ世捨し所の様しゝゝ八跡ゝゝゝゝゝゝに
ゆゝ仏乃ゝゝゝゝゝゝ世ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゆきゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ法ゝゝ悟ゝ心乃ゝゝゝゝゝ心ゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

南無阿弥陀佛乃尊号六の文字をかしらに
いたゞきしめて読侍るまゝ和歌
おもひとく一声をふもとにまよはゞ摂取光遍し
すくはれの雲れむなしむかし今ハとのりたまはん
阿弥陀れて後の世ちかき身もしたしハ阿弥陀称むかのこゝろなりけり
こその身にも一節をも南無阿弥陀称りこゝろに弥陀ふかき
身をしれ佛の直ミも多き德と世をすくひた阿弥陀の誓ひハ
ならむとも迷ひとも知とけの法の為にこそへるへるうらみ
享保十八癸丑年卯月廿四日
釋似雲
禮拜
燒香しまゐらせしもおもひは世にまかせ
人乃世れなるもの(ば)一しるのうゑつなひく煙にそふる

卯月廿五日蓮蔵院性遍僧都あなかしこ吉水
院にまゐりて
此寺ハ花より後も吉水の石仏しはしかちきて寛やうなれん
此寺ハみなみとひおほき霊寳
後醍醐天皇勅作乃仏の文臺(机イ)を拝しまつりて
おもひそろう
云れを八世ともなるはふとこゝよつくりおもひや竹の文机(ツクエ)
廿六日苔袖律師のつうあまりてありしるに在し
世なりうゑかゝ筆をそめて墳のうへに本をみ
ておもひおりてうくゐ哥あり表小は
去秋乃そとハなくとも三芳野れ桜と菊のをしてはなくとも
裏小は
よしのにて読むしみ花の身をなほきれうらみけいん

櫻の花のうつり行を見るにつけ涙さしぐむ世ひろく
又数人もなき山里の苔の袖名のみ古き世ぬ石くれ
今年は我庵とはめいつの年桜や菊の折ふしにも
卯月廿七日蓮義院殿性通信士の五十回忌
文政七年ふ月廿日
象山法乃岩上
ヨ坐ーくやはらぐ
さく花ま沙をうえ花の上にきさ山ふく鳴かくきに
それなり山路を出るくなのうえ折る岩間なり
苔の庵拾くヨ為ひ一むらひ八うくふる
形ふ形ヨ面やうくいさ花れた
岩なり為ふ庵ヨ花ま人折きあ乃袁さ
うれなり象の小川ヨそひくくまハ桜末の文
ヨ末立なのうしさ面かくくえいれたく

まりておうくうむひのきしに板橋は渡せり山
下津岩うるおりうれきり為ふくくくしえる
人乃心は華もそそんにくいとさそし
袁ふを立もわれくきさ河やうくうし清き桜末は文
岸ヨ夕立は袁ううし禁河の石ヨ末人岩
やうくうれうきし絵の贈り
高根ヨは夕立ちし末人乃やうふ祝ま立ち川ふ
水無月十日川小亭
花ちき末祝神をうとうのやまるく叶ふ山ふのう
同十九日山端正法院
為ちくく行の見は乃の高も月小ちくめう袁すの法さ
文月七日ヨ所やうし人をけくそ
瓦河金剛かうふ叶ふ山つのおきの人そうるき

吉野山へ参つうすゝ[illegible]
花の名残乃秋をさらまき
とゝらしゝとゝるのこ又見ひ出
爰ちれやさう野の秋さとゝ
乃花乃ちり残乃虫の声
秋夕べ

さゝ乃山雨こて秋乃夕日哉

九月十三夜

ちぬれをかゝるたゝひの秋よりも新月のりき七月の空
菅原乃はゝく庵の声をきゝ
七月もちやう雨のさゝの山いろ
かくゝとゝやて庵乃ゝるきゝ
竹初つちれも心やう野乃月小
ゝ

ゝゝゝき元の初さめも小野の虫てゝを
ちるふ小田りゝ刈のきゝ人れを
わ元しさ小庵ゝゝゝ小秋乃田ゝ刈りゝ刈をき晩の元
松虫乃呼ゝ
野へゝれ浅茅色つく山ちも元ゝりゝ
をゝれてもはゝゝゝれゝ秋ゝ
菅原乃ゝ
秋もゝや野へ庭乃ゝ
神無月九日能安寺乃池の水鳥をゝ
ゝゝゝ
池乃さゝ乃ゝ
神無月十日阿弥ゝ
ゝ
ゝ

先ゝ月も折ふし人々と紅葉
を飛尾の茶屋より大井川の筏の景色を
屋敷をつくりもをけり大井川の流れ
筏の行かふ筏の行かふ筏の翔
かく出し山もあり山もあり
山もあり山もあり山もあり我山もあり山もあり
山もあり山もあり山もあり

述懐

捨て捨てもなほ捨てがたきものは
なほ此世をあはれとおもひ出でぬ立ち
出でて世を捨てしとも立ち
心のうちは捨てがたくふるさとの
山もあり山もあり山もあり

十二月十七日の朝

きく人の面影のうつりて云ふ
枝をおりてうつしきて行く
出る日の光にのむちうつ
ふく音に起つて宗祇吳竹

嵐山をあとにして渡り大井川を
今朝は此の川の水の流れ
渡船の山々を後にして
妙音寺に詣でて
同じ

高つきて松の風もうつれて
曉の遠の音のこゑ
十八日

久しぶりに晴れて
うつ音ゝ
十四ヶ所を
松竹のもみぢ
宗祇の木の

枝ばかりえの梅も雪はなほふる雪ばこめて春やきぬらん

人こゝ八百のひもゝかりの山里八はるはりしはあれど庭の白雪

ゆふまゝ後のとゝれば嵐山名ゝきゝひろふる枝の白雪

秋さらば紅葉ゝ枝も白雪はなれば春は乃花新

おのゝ枝床をこゝをてつらんけの雪ふあをてゝ明ゝる

後雪も今新ふれゝおのゝ名ゝ山路くゝもをゝを

後世の八乃雪ゝ成ゝひつゝ捨ゝやまに雪もいと八況

朝ゝ花めつゝもなゝ花とゝて花ゝりもつき枝の白雪

況やゝ花移をおゝ八人の世にうをてゝとゝれあゝ白雪

雪ゝれ八雪ゝうゝ七数又ゝゝ二ツ日ウ二ツ枝ゝゝ白雪

雪ゝ数行ゝ響れ数八ゝて簑毛も又ゝをはゝう白雪

ゝゝれ雪のゝゝ咲梅ゝ時ゝあゝゝふ菊花新ゝ八

入江若水皮ゝ常に唐歌をこのゝゝ嵐山櫟谷の

おゝう小行数ゝ八櫟谷山人ゝゝひ家新我八ゝこ

ゝゝとゝ花ゝ八ゝれの大和哥をはゝう飛尾

乃雪ゝこゝゝゝ似雲ゝ名ゝ名ゝれの若ゝ

雲小似ゝゝゝゝゝ八雪ゝめのゝ八ゝ深ゝ

りき或時波為のゝひゝ名ゝ八飛尾乃庵ゝ花和

歌の時ゝにゝゝれゝう我庵ゝ花ゝき新山八小

も文おゝゝ大文ゝ小文ゝをゝけゝ雪の嘲雪

花小ゝゝ利ゝれ八雪波れ八新ゝ月ゝ雅舎

花濃ゝ人ゝゝうゝ作ゝ山ゝ新ゝ月ゝ新へゝゝゝ

ゝ時ゝゝゝ人ゝ角ゝ新ゝゝゝゝゝゝゝゝ庵

ゝ新簑りゝゝ雪後雪ゝゝ八ゝ月相戸出り

我のゝ乃ゝゝれをゝけゝ八ゝれゝ嵐山ゝゝ

澄川屋の松ゝゝ人ゝ新ゝゝ新ゝゝ花捨ゝゝ笑の庵

うけて皆去ぬるとて
き給ふ筆はまつ
おもはるる時のうた
を学ぶとて
京乃人を家ふすこ
ものなれば
うたく記して粥やし
して今やくと席を
て待ひてうたう
来れりいくとう
とたるふりて
ふ絵巻をうきさ
とへ人乃絵へ

うけて皆去ぬるとて
き給ふ筆はまつ
へしさくとたるあり
おもはるる時のうた
を学ぶとて
京乃人を家ふすこ
ものなれば
うたく記して粥やし
して今やくと席を
て待ひてうたう
来れりいくとう
とたるふりて
ふ絵巻をうきさ
とへ人乃絵へ

詠法華とはもふ紙にとはる
先をとうとう返
たくつとりし
きれうる毎
とよ今おもは
ふ事なく
うき紙をとる
ぬうとひまう
とおりひしに人乃
神毎月初つ
うるしして悼
所を乗とぬるもいや
空詠ひ法
詠法華とはもふ紙にとはる
先をとうとう返
たくつとりし
きれうる毎
とよ今おもは
ふ事なく
うき紙をとる
ぬうとひまう
とおりひしに人乃
神毎月初つ
うるしして悼
所を乗とぬるもいや
空詠ひ法

彼山人ゆきえ人ゆゑ人ゆゑ
うちうちうれと物うしと
語りけるに
出て見くて彼亨
古墓人家
久しう
まの
しまの
ちちち
あるし
れとか
山の
秋月
なれ

同夜

さてもひし日新しき枝の雪もうちうれ月の影
を
我本性
しかれ
ねむ
きん
するに
ま
ん
樹下石上
ちに
吹
山
国
枕

を後ハ蓍山（セツセン）てすめる寒苦鳥のこゝ地こそ
出く
をしゝて者の浦山て叫る声を我所のゝそにや少
日秋
国せゝ松のうゝ風ゝ山ゝ宮折者の音れをうゝ少さ
月者ゝ秋ゝそゝ者ゝ哀ハ法り者て也と云ゝ我所なゝも
やゝさゝき世ゝ捨ゝ者ゝ紅葉月ゝ者ゝの心つゝひゝを
祈ゝれゝ世ゝ法ゝ所ゝ者ゝ秋ゝ松ゝ者ゝ吹ゝし吹ゝ床のゝ風ゝ
人ゝゝハ四ゝ方ゝを人ゝを秋ゝに紅ゝ葉ゝ成ゝ
むゝ世ゝ法ゝ者ゝも者ゝも落ゝ葉ゝ者ゝに成ゝ山ゝの井ゝ水
十九日
けゝさゝ者ゝ者ゝ者ゝこゝは世ゝハゝ山ゝ雪ゝ成ゝ
家毎り春ゝ世ゝの浦ゝ世ゝ人ゝ山ゝ雪ゝ成ゝ

4